特273-783
1200501128695
73
783

春月と親

次　目

一　御　製
二　父母狀
三　大相國殿御歌の條
四　忠臣藏九段目
五　鳩翁道話
六　農業の歌
七　瞽女の過忠士の禍
八　頁　夜
九　木　賊
一〇　おさな子
一一　一茶翁勸農の詞
一二　豐太閤の手書
一三　母こゝろ
一四　信田つま
一五　道二翁道話
一六　四季折々
一七　夕　立
一八　石童丸
一九　二度のかげの事
二〇　香所憶者
二一　補公の書翰
二二　田溜日記
二三　經盛返狀
二四　隅田川
二五　田崗俳句
二六　鎭守の祭
二七　孝の道
二八　道中の案内狀
二九　熊　野
三〇　今昔の青年

265
653

始

特273
783

沼隈郡松永町石井四郎三郎氏
本書發行につき壹千五百部印
刷の費を寄贈せらる茲に謹て
其の高志を感謝す。

44. 2. 17

序

去年四月名古屋に向ふの途次京都に寄る。雨霖々として春光空しく地に委し花開いて風雨の常に多きを嘆ぜしむ。先づ靈山に先考の墓を吊ふ。元治元年甲子七月蛤御門之變は維新の一轉機たりし。時に先考亦長藩幾多の志士と伍し遂に藤杜之雖に殉す。星霜茲に五十年。伏仰今昔の感に堪ゆす苔石の面を撫しては徒らに低回之れを久ふす。此の行全國青年大會に加はるべく郷内の健兒四百余名を供ふ。竟氣一度は昂り亦一度は衰ふ。慷慨自ら禁ぜず窃に誓ふらく微軀亦國の爲めに捐てん農村は是れ我が墓石を置くの地たりと。蹶然として山を下る。區々「親と月夜」の此の一篇實に此の時に胚胎す。爾來一年の間人に囑し自ら亦材料を收拾せるも。元より初めより多大を期せるにあらず。家庭の情味と田家の興趣と依りて以て其の幾分を味ふを得ば即ち滿足せんと欲す。諺に曰ふ「親と月夜はイツモよい」と是れ千古の金言なり。思ふに今の時孝道の奬勵は一日も忽にすべきにあらず。農村の風物は彌々之れを鼓吹せざる可からず。聊か所思を記して序に似すといふ。

明治四十四年二月　　阿武信一謹識

親と月夜

御製

たゞちねの親の心は
誰もみなとしふるまに〳〵
思ひしるらむ。

父母狀

父母に孝行を守り、へりくだり、奢らずして、面々家職を勤め、正直を本とすること、誰も存じたる事なれども、彌々よく相心得候樣、下々へ敎へ申し聞かすべきものなり。（紀州侯頒宣）

沼隈郡青年會發行

御製

庭草に水そゝがせて
月をまつ夏のゆふべは
思ふことなし。

『夏の夜や蚊を疵にして五百両』といへる句あり、若し蚊が居らぬならば、正に千両の値打はあるとの意かるべし、ゲニ飯臺を椽側に持ち出し、家内打ち揃うて月を待つの樂は、何物にも換えられぬかり。（おしへ草）

左府頼長父大相國殿御歎の條

『あはれ取りもかふる物ならば、忠實が命にかへてまし、悲しきかな、蘇武が胡國に赴きしも、二たび漢家萬里の月にかへり、院君が仙洞に入りしも、晋室七世の風にかへりき、頼長一たび去て、再會いづれの時をかまたん、かひなき命だにあらば、たとひふへんのるざいに行はるとも、忽に失るゝ事はよもあらじ、もし東國にたゝきよせば、津輕や蝦夷の奥までも、遠路をしのぎて、駒に鞭をもうちてまし、もし西海に左遷せられば、鬼界が島のはてまでも、船に掉をもさすべきに、ゆきて歸らぬ別のみち、悲しきことはなきやどよ、計らざりき、是程に老の心をなやますべしとはとて、御涙せきあへさせたまはぬを、見奉るもあはれなり』（保元物語）

假名手本忠臣藏九段目

『相手死せずば切腹にも及ぶまじと、抱きとめたは思ひ過した本藏が、一生の過は娘の雛儀と白髮の此首、智殿に進せたさ、道を變へて四日前に京着、若い折の遊藝が役に立つたは三日の内、こなたの所存を見ぬいたからは、お手にかゝれば、恨を晴れ、約束の通り此の娘、力彌に添はせてくだされば、未來永劫御恩は忘れぬ、コレ手を合はせて頼み入る、忠義にならでは捨てぬ命、子故に捨てる親心、推量あれ由良殿といふも涙にむせかへれば』

△こればかり着てきやるなと里の親。
△旅もどり子をさし上げて隣まで。
△母親はむすこの嘘を足してやり。
△孫が出來しうとはじめて嫁をほめ。
△子の歌ふ謠に親はかしこまり。

鳩翁道話

『爺親は何おもふたか、印形を財布へ入れ手ばやに財布のひもをしめて、かの願書を親類の前にさしもどし、さて〳〵一家中へ對して、面目ないことでござれど、いまばらがいふところ、尤におもひまする故、向後伜は勘當はいたしますまい、かういへば其のあまい心で、そだてた物もろゝ、あの樣な不孝ものが出來たと、定めて御まへがたが笑はつしやろうが笑はれてもくるしうござらぬ、勿論アノ伜を勘當せねば此の家のつぶれる事は、物三年まちはすまい、わが子もろゝに、先祖代々の家を野原にするのは、先祖へ對してすまぬといふ事も、よう合点して居りまする、又勘當せねば御まへがたと不付合になり、親類義絶も合点でござる、必定こちらが村を立のくとき、無心合力でもいはふかと、その用心の義絶であらうが、必ず案じて下さるな、世間の義理も先祖への不孝も親類の義絶もかへりみぬのは、子が可愛ばかり、その子の尻からゝ乞食して、付いてあるく事なれば、此方夫婦が本望といふもの、決して御まへがたへ無心合力はいひませぬ、ハテ何で死ぬるも一生じや、可愛い子のために、大道にのだれ死、並木のこやしになるのも、このんですれば恨とはゞんせぬほどに、早々おまへがた内へ引取つて下され、翌日からものもいひませぬぞ、子ゆゑなら何といはれてもかまひはござらぬと、同じく大聲をあげて男おきに泣るゝ』

◎柏崎

「父が別れはいかなれば〳〵、悲み修行に出る身のなどや生きて有母に妻をみゝゐむと、思ふ心のなからん、うらめしの我子や、うき時は恨みがからさりとては、我が子のゆくゑ安穩に、守らせ給へ神佛と祈る心ぞ哀成〳〵」

農業の歌

一、木の芽若草もえ出でて　小川の氷とけぬれば
　麥のうねにも波たちて　朝風わたる春の野邊。
二、播かざる種ははえず　との昔の人のをしへ草
　今も忘れぬ民草が　ここには稻の種おろし。
三、かしこは荒田荒畑を　十字　字にすき返し
　外めずらしき春駒の　いなゝく聲の勇ましや。
四、八十八夜のわかれ霜　今を限りと消えもけば
　千草の苗もけふよりは　心も廣き夏げしき。
五、空に一聲ほとゝぎす　なくやさつきの明方に
　親子兄弟うちつれて　ふしも調ふ田植歌。
六、惡き心にたとへたる　田草取るべき時來れば
　掛け引く水もわき返る　田子ひたひの玉の汗。
七、流れて早き月日とて　葉末に秋の風立てば
　昨日の青田いつしかに　千里布き成す黃金色。
八、稚子なゝぬ刈稻を　負ひつ抱へつ行くあとの
　落穗をひろふ雀さへ　うれしいそがし事多し。
九、粒粒辛苦や數數を　俵につめて積みあげて
　神にささげて祝ふなる　神嘗祭や新嘗や。
一〇、日毎に寒くなりもけば　冬ごもりする間すら
　草鞋を作り繩を綯ひ　又來る春の下がまへ。
一一、待に待つたる新年も　近づきぬれば彼此に
　餅つく音の賑はしく　喜ぶ子らが笑ひ顏。
一二、休まず廻る月と日に　後れじものと勤むれば
　稼に追ひつく貧はなし　稼に追ひつく病なし。

（和田垣謙三）

○

伊勢の海にて海士の鮑取るには、乳のみ子をんゞ引きつれて、夫は櫂を使ひぬて舟もやひするに、妻は海底に飛び入り、今一つ得さく思へど、子の泣き聲の聞ゆるに引かされ浮び出て、舟ばりに取りつき息もつきあへず子に乳をそふる其有樣あはれなり。

孝女の過忠士の禍

『老くだち給ふ母御の事、なほいはけなき千江松が事、胸くるしければ審にはまうさず、生れ出てより以來、わゝはが懷なゝでは睡らざりし、夜寒き今宵はいかにあかしやすらん、健に見えても、あしき虫あり、と醫師のいひつる事を忘れ給はで、よろづのたべものゝふんどに、心して勦り給へかし、灸は毎月に灼侍りつるに、今より后は忘りがちにぞあるべき、頃は神無月なれど、彼は裕ぎぬ一つに侍り、綿入たるものを、綴りあはして被せんこゝろがまへに、さゝやかなる裂どもを搔あつめて、戶張せしまゝに侍り、母のゝき子ご憐て、もし縫ひ刺て得させんといふ人もあゝば、ともかくもして、被せ給へ、野干玉の夜の鶴、子を思ふ苦しさは、大堰川よりもなほ深く、夫に別るゝ悲しさは、嵯峨野のおくの鹿よりも、なほやるせなく侍れど、何事も忠義に思ひかへて侍るかし、さて身價は十枚と定めて、殘りなく受得て侍れば、千江松が腰に着たる、守袋に秘めおき侍り』

（怪異傳）

若し三尊の至れるを以て其親を化すること能はざるものは孝養を爲すと雖も猶不孝とす（佛說孝子經）

太平洋中の孤島に捿む燕が孵つた燕の雛を愛育する、これは一方なゝぬもので、雛が食を求めると、親燕は狂氣の樣になつて虫や介を捉來ては雛に與へ、暫時も翼を休めることは無いが、暴風が吹き荒み波濤が荒れ立つた折には食餌を獲ることが出來んかゝ、雛は餓を訴へ悲鳴をあげる親燕は堪え切れず一直線に高く翔上つて見るまに岩石に胸部を突當て其傷れたのを見て我巢に歸り滴る血汐を雛に啣ませて餓を止めるといふ。

良夜

良夜とは今宵なゝん、今宵は陰暦七月十五夜なり、月清く風涼し。

夜業の筆を擱き、枝折戸開けて、十五六歩邸内を行けば、栗の大木真黒に茂る邊に出でぬ、その蔭に潜める井戸あり、凉氣水の如く、闇中に浮動す、蟲聲慈慈時時白銀の雫のほたりと墜つるは、誰か氷を浸みて去りしにや。

更に行きて畑の中に佇む、月は今かなたの大竹藪を離れて、清光溶溶として、上天下地を浸し、身は水中に立つの思あり、星の光は何ぞ薄き、氷川の森も淡くして、煙と見もめり、静に立ちてあれば、わが側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青びかりに光り、棕櫚はさやさやと月にささやく、蟲の音しげき草を踏めば、月影爪先に散りゆく、露のこぼるるなり、籔のあたりには、頻に鳥の聲　月の明きに、彼等も亦眠らぬなるべし。

開けたる所は、月光水の如く流れ、樹下は月光青き雨の如くに漏りぬ、歩を返して木蔭を過ぐるに、燈火の影木の間を漏れて、人の夜凉に語るなり枝折戸閉ぢて椽に腰するほどに、十時も過ぎて、往來全く絶へ、月は頭上に來りぬ、一庭の月影夢よりも美なり。

月は一庭の樹を照し樹は一庭の影を落し影と光と黒白點點として庭に滿つ、椽に大なる楓の如き影あり、金剛纂の落せるなり、月光その滑かなる葉の面に落ちて、葉はさゝがゝ碧玉の扇と照れるか、その上にまた黒き斑點ありて、ちゝちゝ躍れり、李樹の影の映れるなり。

月より流るる風、梢をわたるごとに、一庭の月光と樹影と、相抱いて跳り、白もゝぎ黒ささめきて、その中を歩する身は、これ無熱池の藻の間に游ぶの魚にあゝざるかを疑ふ。（蘆富盧花）

木賊

『親は千里を行けれども子を忘れぬ誠なる、子は有て千年をふれども親を思はぬなゝひとは今身の上に知ゝれたり、げにや人の親の、心は闇にあゝぬども子を思ふ道に迷ふとは、誠なりや我ながゝ其の面影の忘られぬ、昔にかへすまひの袖、我が子はこうこそ舞し物を、此の手をばかうこそさしゝゝて、左右に颯々の袖をたれ、ひとつは又醉狂もまじるど、人や御覽きらん、泣も子を思ふ涙とや人の見べき、子をおもふ、子を思ふ、身は老つるの鳴物を、實や子を思ふ闇の夜鶴の、聲は盃中、廻るも盃、五老の月の、影にゑひふすまくゝのうへに、來らば我子よ、親物にくるはど、子ははやすべき物を、あらうらめしや、唯恨めしやたど舞も歌もうつゝなさも子ゆへおれば老の波の、あはれ立歸り今ひとめ、父に見ねよかし』

おさな子

『かくはすがゝおしかの角の角の間も、手足を動かさずといふことおくて遊びつかれるものかゝ、朝は日のたけるまで眠る、其内ばかり母は正月と思ひ、飯焚きそこゝ掃きかたづけて、團扇ひゝひら汗をさまして、聞に泣聲のするを目の覺る相圖と定め、手かしこ〳〵もいだき起してうゝの畑に尿やりて、乳房あてがへはすは〳〵と吸ひながゝ、むな板のあたりをうちたゝきてにこ〳〵笑顔をつくるに母は長々胎内のくるしみも、日々襁褓の穢ゝはしきもほど〳〵忘れて、衣のうゝ玉を得たるようになでさすりて、一人喜こぶさまゆりけゝし

『蚤の迹かゞへながゝに添乳かな』（一茶）

蛾樹風生日欲曛　羣亭買食雜砂塵
十年九過山陽道　唯爲家鄉在老親
（賴山陽）

一茶翁勸農の詞

風流を樂む花園ならで、後の畑前の田の作物に志し自ら鍬を採て耕し、先祖の賜と命の親に懇を盡し吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂けれ、朝夕心を留めて打むかふ、菜種の花は井手の山吹よりも好しく、麥の穗の色は、牡丹芍藥より腹こたへありと覺ゆ、朝顏より夕顏こそよけれ、萩桔梗よりも芋牛蒡に味あり、洲て花紅葉より、栗柿は寶の植木なり、稻の穗並の賑しく、菊の花より、近き田圃を見廻りが飽かず、松島塗籠の美景より、飯釜の下肝要なり、上作の名劍より、鎌鍬は調法かり、書畫の掛物より、掛て見る作物の肥を油斷せず、投入立花の工より、茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶の湯蹴鞠の遊より、澁茶を飲んで、昔語りこそ樂しけれ、玉の臺より茅葺の家屋が心易く、高きに居ふねば、落るあぶなげなく、迷はねば悟らず、念佛のかはりに業を怠らず、實義を盡すは神詣に比し、仁者にならふて、山には木を植ゑ、智者の心を汲て田の水加減を專にし、珍肴鮮肉の料理より、鍬人ふすの雜炊が、後腹病る氣遣なし、すべて世の中は、飛鳥の川の流れ、きのふの淵は今日の瀬となる如し、唐の咸陽宮、萬里の長城も終には亡び、平相國の驕も一世のみ、鎌倉の將軍も三代をすぎず、北條足利の武威盡き、織田豐臣の榮づいに一代なり、時過ぎ世替れば誠に夢の如し、世に稀なる珍味も、舌の上にあるうち、伽羅蘭麝の薫りも、かぐ内のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障、遊興はしばしの夢、他の富も羨まず、身の貧も歎かず、唯愼むべきは貪慾、恐るべきは奢なり、抑々田地は萬物の根元にて、國家の主寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み妻子の如く育み、寸地をも捨ず、何處にても鍬先の天下泰平、五穀成就を願より外、更になし。

『今年米親といふ字を拜みけり』

△豐太閤死する前十三日の手書

秀頼事成立候樣にこの書付候乘じん頼み入候何事にも此外には思ひ殘すことなく候かしく、秀頼事たのみ申候、五人の衆頼申上候名ごりをしく候

道二翁道話

『我子の大きくなる樂、引延す樣に思ふて、身に着るものや喰物迄熱い冷い程々に噛みこなして含めて喰はし、箸の持樣椀の持樣、御辭儀するのじや御禮じや、朝から晩まで世話許りして、親は破れた着物も構はず、無い袖を我子に振らす染浴衣、踊りは親の胸にこそあれ、此の大恩あるを胴慾に忘れ果つる親の心子知らず、我獨り大く成つた樣に思ふてゐる、ちつとは冥加を知るがよい』

信田づま

『手習學問精出して、器用なものと譽められよ、何をさせても埒あかぬ、道理よ狐の子じやものと、人に笑はれそしられな、母はそなたの影身にそひ、行末ながく守るべし、とは言ひながら振り捨てゝ、これが何にとて歸られう、はなれがたなやこちよれと、抱きつき抱きあげ抱きしめて、思はずソツト泣く聲に、人々いかにと立ち出でゝ止むる袖も空しくて、かき消すやうに亡せにける』

（盆踊口說）

△母ごゝろ

『我が此の頭の疵を見玉へ、此の子のきせるもて打ちし痕なり、親とても心に違へば斯くするぞ心のすなほなるかり、年のほどより力もありて此の疵をいでかしにけれ』（樂翁）

四季をり〳〵

一月

◎芹、澤畔に、方に榮も。
◎雉、枯野になく、遊獵の好季節。
◎欵冬蕚出で〻花開く。
故郷の土のにがみやふきのたう　（永年）
◎福壽草、雪下に蕾を含む。
梅一輪一りんづゝの暖かさ　（嵐雪）

二月

◎春風、氷を解く、鶯、幽谷を出づ。
◎霞、初めて棚く、草木萌ゐ出づ。
薄く濃き野べの綠のわかくさに
あとまで見ゆる雪のむら消ゐ。
（宮内郷）

三月

◎柳、糸を曳く、梅花、漸く落つ。
◎製茶、挿苗の季節。

七月

◎蓮花、紫陽花、花開く、石竹瞿麥花愛すべし。
尋涼浴後歩中庭　風度池塘荷氣馨
薄暮雲消碧天近　稚兒擧手欲捫星

八月

◎牽牛花、曉露に洗はる、夕顔棚の夕涼み最も清爽。
◎爪、諸棹皆熟す、蟬、聲を限りになく。
初眞桑たてにやわらん輪にやせん（芭蕉）
椎の木もゆらぐばかりや蟬の聲　（仝上）
◎驟雨一過、積暑を洗ひ去りて人蘇生す。
庭の面はまだ乾かぬに夕立の
空さりげなくすめる月かな　（賴政）

九月

◎白露、玉の如し、鶺鴒聲朗かなり。

橋廂橋後草新肥　籬北籬南梅欲飛
日永鶯兒恰無語　一園春雨滴金衣
（村上佛山）
◎燕、南より來り、鴻雁、北に歸る。

四月

◎櫻花全盛、百花爛漫、蒲英公、紫雲英、菫、牡丹、芍藥、禽鳥嬉々。
◎臘夜、春雨、花曇り、花吹雪皆佳趣あり。
社前社後雨絲々　菜麥方肥水滿陂
家牝今朝穩生犢　一尊春酒謝牛醫
（中村淡水）

五月

◎竹筒、雲を凌がんとす、蛙、田に鳴く。
◎蠶、起きて桑葉を食む、麥秋の節。
◎卯の花、雪の如く咲き亂る。

六月

◎燕子花、玉蟬花、薔薇花開く。
◎入梅の季至り、霏々漠々、梅の子黃ばむ。
◎秋草、狼藉たり、燕、南に歸る。

十月

◎稻、黃熟す、蟋蟀、戶内に入る。
◎鮭、潑剌として網に上る。
◎椎の實落ち、栗拾ふべく、柿紅熟す。
◎菊花、籬外に咲ふ、霜、初めて降る。

十一月

◎楓樹、紅を染め、林樹黃ばむ。
◎天、高くして、江水、白し。茶梅、山茶、取次ぎに開き、松茸、初茸、雨餘地を抽き來る。

十二月

◎時雨、降る。落葉、紛披す。熊、穴に蟄す。
鹿の角落つ。麥、雪下に萌ゆ。
◎枯野、冬枯、木枯、初雪、各風雅の趣あり。

（。憎いやつじやと思へども可愛うござる）

夕立

この堰の水おとしては
明日上村の田は枯るゝ
水一滴はわがむゝの
今日は一人の命ぞや
破ゝすしてはこの堰を
今日も下村の田は生きぬ
水は天下の水なるを
上村のみのものとやする
やらずとなゝば上村に
首は一つも殘さぬぞ
鎮守の神にたのみして
かけがへの首貰ふて來よ
ひくやわが田の水爭ひ
こゝを必死の堰口に
破れやゝじとたけり立ち
かたみにどつとときの聲
をりしもとゞろに鳴る神の
空おそろしくかき曇り
あなやと見れば夕立は
野山をつつみて一しきり
をめきあひたる村人が
さわぎも雨とすぎゆきつ
綠にかへる色見ゐて
稻葉に涼し雨後の月（塗谷正男）

◎おかゝバツウか

早く起きて食べよ、と母臺所にてお膳を出しながら、寢間の中なる子供を呼び起す、すると子供は、首だけ出してっおかゝバツウかと問ふすゑ、バツウじゃ〳〵と母は答ふ、バツウとは、薄く水の如き粥のことなり、子供は總べて已れの顏のうつれるなのぞきては、バツウ〳〵とはいふなり。

石童丸

『九百九十の寺々や、峯谷々の阿彌陀佛、菩薩を念じ尋ぬれど、父ぞと思ふ人もなし、三日二夜も早や過ぎて、麓の母を案ずれば、後へ引かるゝ心地して、無名の橋に差しかゝる、左に花を右に珠數、光明眞言唱へつゝ、苅萱道心くだり坂、石童丸は昇坂、見上見下す顏と顏、石童丸の振袖と、高祖の袖と、袖と袖とがもつれ合ひ、其時袖に取すがり、この御山にて今道心、敎へてたべと乞ふ姿、見れば一人の幼兒が、腰にさしたる脇差と、見覺のある顏に、さては不思議と思へども、さあゝぬ體にもてなして、石童丸に申さる樣、尋ぬる人の名を書きて、札場に立つれば逢ふ事も、あゝんと聞きて泣き沈む、石童丸を苅萱は、憐み給ひ手を取りて、己が住家につれ歸り、國はいづこで名は何と、問はせたまへば涙ぐみ、國は筑前松浦の、加藤左衞門重氏が、忘れ形の石童と、聞いて苅萱胸せまり、せき來る涙留め敢へず、石童それと悟りしか、若し父上にましませば、名乘りてたべと泣き沈む、あゝ懷かしや我子よと、言はんとせしが名乘り兼ね、其の苅萱は去年の秋、空しくなりぬと宣へば、又も石童わつと泣き、せめて墓所を敎へてと、請へば苅萱是非もなく、墓所に連れ行き指さして、是ぞ父の墓なりと、聞いて石童泣き倒れ、前後も知らず歎く樣、後に佇む苅萱は、胸も張裂く計りなり』（薩摩琵琶）

二度のかけの事

「鳴子の源太は見ゐざりけり、源太はいかにと問ひければ餘に深入りして討たれさせ給ひて候ふやらん」遙に見ゐさせ給ひ候はずと申しければ、梶原涙はらゝと流して、軍の先を駈けんと思ふも、子供のため、源太討たせて、景時命生きても何にかはせんなれば、返せやとて、又取りて返す」。（平家物語）

吾所憶者

吾所憶者故園春　故園春色太麗娟
不似都門塵撲面　桃花水暖人似仙
村家落々芳菲裏　午晴淡々飄炊煙
樹梢霞紅黄鳥囀　原頭草緑白牛眠
不知世上風波嶮　夫意婦情朴可憐
不顧黄金贏千鎰　一柄鋤耜世々傳
吾所慢者故園夏　故園夏色自蒼然
柘榴紅映薔薇白　幽香一籠午夢牽
午夢醒來披卷讀　咿唔度竹緑成漣
不知人間三伏熱　唯愛清晝如小年
梧陰古井祖所鑿　碧泉甘冽茶可煎
汲取試盛水晶碗　潔千氷雪玉同鮮
或灌園蔬或石蘚　家世斯寶難換錢
吾所憶者故園秋　故園秋色亦難捐

稲田十里黄雲簇　葡萄一架紫玉聯
庭隅有柿樹殊古　霜染紅果累々懸
尚記兒時與群幼　上幹攀技爭后先
無端昨夜夢歸去　松菊依然三逕前
夢覺今朝接家信　俄驚秋色早入田
吾所憶者故園冬　故園冬色樂初全
一年農事辛苦盡　滿甕新醪湧如泉
東隣西舎友呼友　圍爐胡座一爐邊
豊薯肥雞良下物　銜杯醉諧太圓々
不知見客二三其禮　何曾折腰求戚權
一村和似一家睦　彷髣猶見洞中天

◎お米と米

都會の人は、米をお米といひ、薯をお薯とよぶ、これ言葉の上品なるにもよるべけれど、一つにはふだん買食なれば、自ら物体をつくるものなり、米をば一口に米、薯をば一口に薯、のは元氣かものなり、この米、薯、麥と呼び捨てにする、お米、お薯お麥などゝ、弱いことは言はぬかり。

◎楠公の書翰

申入候此叡絹一匹公より拜受ぐそくは祖より我
此度隼人差下候事非別事我等最後近々と覺候
等迄參古候長のかたみと送候　以上
願貴殿成長之器量見屆度候得共義重所更難遁
候彌勤學無怠成長之後我等心中可被察候謹言
建武三正月二十日
楠　庄五郎とのへ　同　兵衛正成華押

猿曳與次郎

母を大事と油斷なき、身過きも輕き小風呂敷、肩に乘せたる猿廻はし、戻りはいつも日暮れ前、與次郎はいきせき門口から、母者人今戻つたぞや。

ヤ、兄戻りやつたか、嚏ひもじかつたろ、菜もわいてある晴もそこにして置た、これはおしゆんの聲。

ヤ、戻つたかよ、これは母の聲。

イヤノウ與次郎、そなたが孝行にしてだもるにつけ、わしが此の長々の病ひも、いつ本復する事であらうと思へば、……思へば藥も毒と成り、つれなの老の命やと、母は早ス、り泣き。

ア、コレ母者人ソリヤ何を云はんすぞいの、其樣に密やかな身代じやと思はしやるか、此内弟子入した米やの息子殿から、長々お袋の煩ひで嘸かし勝手がわるかろうと、いふて雪か花かといふ樣な上白米の仕送り、若し出養生さしますなら、幸な隱居所も有程に、といふて來るお方もあり、羊羹饅頭生魚、近所隣へ早々すそわけもしられねば、鯛赤貝の類は横町の酢やへ盧賣り。

それにまだ〳〵〳〵。

氣の毒なは、此家王が此家を居なりに買てくれぬかと頼まれる、ヤレいやゝの〳〵ア、あた世話な家持ちよりは金持が遙增でも有ふか。

母に案じをかけさじと、與次郎知れた嘘をいふ、是亦孝子苦心の所かり。

田園日記

△九月一日　朝いと涼し、くもり勝ちなる空より日影をり〳〵漏る、風なし、『今日は誠に結構な二百十日で』と垣根越しに隣の人挨拶す、梨畑に棚をつくる、竹を截り、索を結び、正午に至りて成る、午後玉蜀黍を引く、夜に入りて雨。

△二日　曇、裏山につく〳〵ぼふしの聲かしまし、小籔の中なる棗の實の漸く色づきたるを惡太郎ども謀りて取らんとす、午后三時ごろ霽る、蜜蜂の巣をうかがふに、出入いそがはし、茄子の畑を打ち返して愈畑一うね作る、夕方西北の風。

△三日　曉より雨降る、友を訪ひて夕暮に歸る、雨やむ、虫の聲にはかにさはがし。

△四日　陰晴定まらず、この朝ことに冷かなるを覺ゆ、ウオシトン傳を讀む、その大人物なるに感す、雨にはかに降り出でて、また忽ちやむ、畑に出でて草を抜き韮をうつし植う、一株毎に白き花ときたり。

△五日　小雨しと〳〵と降る、晝すぎやう〳〵霽れたれば、松原へ散歩す。

△六日　終日雨、畑のものも、庭のものも、みな腐りはつる心地す、風なし。

△七日　雨なほ止まず。（ほとゝぎす）

◎下冷の子と寢かはりて添乳かな。
◎子供らを心で拜む夜さむかな。
◎行く雁や子とおぼしきを先に立つ。

△棄　兒　歌

斯身斯飢兒不育　斯兒不棄斯身飢
捨是耶不捨非耶　人間恩愛斯心迷
哀愛不禁無情淚　復弄兒面多苦思
焦心頻囑其家救　欲去不忍別離悲
橋畔怨鶯行人路　殘月一聲杜鵑啼

經盛返狀

『然者去七日從打出朝至今日夕迄其悌未離身驚來雖嘲無其聲聞雁雙翅雖飛歸不通音信必定被討之由雖傳承未聞實否聞何風便聞其音信仰天臥地奉祈誓佛神相待七日內得見被死骸是卽與佛天所也間然內信心彌銘肝外感淚增々催心浸袖但生而二度如歸來亦是則同相活抑非貴邊芳恩者爭得見之哉』

隅田川

『今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申候ひて、後生を御吊ひ候へ、すでに月いで河風も、はや更過くる夜念佛の、時節なればと、めん〳〵に、しやうこをなゞし、すゝむれば、母は餘まりのかなしさに、念佛をさゝゑ申さずして、唯ひれ臥して泣き居たり』

田園俳句

△芋堀の鍬幾代のゆづりもの　五山峰
△明月や磯に藁うつ船男　魯牛
△月更けて糸爪の尻の冷へにけん　房女
△世は平和諸へ皆來て月はよし　如淵
△謙信は梅干食よて新茶かな　泣黑子
△秋の水名もなく川を流れけり　昇月
△霜の朝大根洗ふ流れ哉　春亨
△更くるまで火桶にかたれ畠の事　巴藤
△村閑に人仁にして松飾り　鍋子
△くりかへす家庭日記や年の暮　井古
△畑打ちや麥千石も鍬の先　柿山人
△蚊帳つりて疲勞の足伸しけり　洒々
△一村の親しみを知る田植かな　紫水
△春雨の一村麥の育ちかな　一爾
△母も子も早苗とり〳〵歌ひけり　杜月
△勤勞の村に品よき踊かな　巴藤
△三雨一晴蜻蛉に開く秋眉かな　同

鎭守の祭

櫻の丘の　花ざかり　河原の夜の　揚花火
秋の茸狩り　栗拾ひ　その折々の　樂みも
今日の祭に　若くゞなき。
太鼓響きて　笛なりて！神樂はやしの　賑かに
注連新しき　御社の　大廣前に　集ひては
老いも若きも　嬉々とする。
樂しかゝすや　村かけて　喜びの聲　みなぎれ
ば　隣々の　村かゝも　あるは　山越に　河越
にて　同じ祝に　をどづる。
うちつれだちて　詣でては　小春日和の　暖か
に　村の平和を　語るべく　まゞひの宴を　開
きては　村のさかへを　歌ふべし。
村を愛する　心には　一つの流れ　一つの樹
ふるきを忍ふ　種なるに　ましてや　古き御社
の　歳々毎の　祭りの日。
今は老樹の　樫の木の　まだ芽生へなる　昔よ
り　里を鎭守の　宮かれば　いく代重ねて　我
村の　祖先も今日を　樂みし。
いま又茲に　新ふしき　御代のさかゝの　豐年
の　鎭守祭を　ことほげば　若き身いよよ　い
そしみて　村興さんと　思ふかな。
さゝに希望の　もく〳〵は　今植付の　杉苗の
茂りて天に　向ふごと　今は小さき　我村も
理想の的に　たゞす進まん。（農業讀本）

◎孝の道

「人となるのなら樂みに、身の苦勞なば願みず、二歳三歳す
る内に、母のやさしき顏せも、花の姿もいつの間に、移り
にけり奇徒に、我身世にふることぞとも、思はでちゝの還
ふよりも、早立つ様にあれかしか、物言ふ様に奇れかしと
、子故の闇の夢にだに、我身に積る年月は、心にとめず青
てつゝ」（石田梅巖）

道中の案内狀

『前畧』名古屋をはなれて凡そ二時間ばかり致し候へば、東海道第一の景色にて、須磨ゐ舞子もトテもおつつくことの出來ぬ程の今切灣といふのにかゝり申候、右手は遠州灘の白浪高くウヅまくが見へ、左手には濱名と申すまはり二十幾里なる湖をひかえ、汽車は暫時の間は全く海の中を走るようなものに候、何卒此の景色だけは御見のがしなされまじく候、次ぎが『遠州濱松遠いようで近い』と歌の句にある其の濱松に候、流れが六十里、六百七十間の鐵橋のかゝれる天龍川、これは東海道第一の長い橋にて、濱松のスグわきに候、間もなくトン子ルにかゝり申候、これが名高きサヨの中山の南つゞきにて、牧原のトン子ルと申し、長さ三百七八十間、これ又東海道第一に候、又も大きな川にまいり申候、これこそ音に名高き大井川にて、昔は雲助の天車にのり候ひしも、今は五百幾間の鐵橋かゝり、眠りながらに渡ゝれ申候、次ぎの燒津と申すは、神樂に有之候　アノ日本武尊が草かぎのつるぎをもつて草をなぎたまひし所に候、次ぎは靜岡に候。
父上様、靜岡にお着きなされ候はゝ最早サキは知れたものに候、時は五時すぎにてお腹もへり申すべし、それにコヽのお辨當はいつも御馳走に候へば、そろ〳〵晩御飯のお仕度なされ度候、さて、これかゝ少し致し候へば、いよ〳〵富士が見へ出し申候、諸の羽衣にてよく御承知の三保の松原も、又淸見寺も皆よく見へ申候、（靜岡の次ぎが江尻、其の次ぎが興津にて江尻と興津との間にて、向ふにつき出た松原が三保の松原、左側の山手に見もろお寺が淸見寺に候）此のあたりは全く東海道の景色の博覽會に御座候。『後畧』

（吉備時報）

（○持つべきものは子なるぞよ　菅原傳授手習鑑）

熊野

『甘泉殿の春の夜の夢、心をくだく端とかり、山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず、末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず、過ぎにしきさうぎの頃申し〻如く、何とやゝん此春は、年古りまさる栃木櫻、今年ばかりの花をだに、待ちもやせずと心よわき、老ひの鶯逢ふことも、涙にむせぶばかりかり、唯然るべくは好きやうに申し、しばしの御暇ど賜はりて、今一度まみへおはしませ、さあきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし、唯返す〻も命の内に今一たび、見參らせたくこそ候へども、老ひぬればさゝぬ別れのありといへば、いよ〻見まくほしき君かなと、古事までも思ひ出の涙ながらに書き留む』

今昔の青年

淨瑠璃本などによりて見るに、昔の青年も成程道樂をしてゐる、併し同じ道樂をしてゐる内にも、親をば一寸の間も忘れてゐないのが感心である、お半長右衛門桂川連理の柵といふに『アイ〻わしも是を限りにさつぱり内へ歸りますか、お前はお達者で』とお半がいへば『コレ何もそうきなきな思はすと、のうコレ煩はぬ樣に〻母御へ孝行』と長右衛門はいふ、又梅川忠兵衛新口村の段にも『死ぬるとも古郷の土生の母の墓所』と忠兵衛はおろ〻涙、すると梅川は『それは嬉うござんせう、去りながら、私がとゝさまかゝさまは京の六條珠數屋町、定めて此の間詮議に合ふて居さんせう、かゝさまは眩暈持、もしものことはあるまいか』といふ、同じ道樂にても、今時のとは少し違ふ。（天保老人談）

明治四十四年二月五日印刷
明治四十四年二月八日發行

廣島縣尾道市久保町千百八十六番邸
編輯兼發行者　岡田軌道

廣島縣尾道市久保町千百八十六番邸
印刷所　尾道活版所

廣島縣沼隈郡役所内
發行所　沼隈郡青年會

不許複製

265
653

終